

二席 沖縄県文化振興会理事長賞

上がる虹雲のじぐも — 銘苺子異聞 —

田幸 亜季子

〈あらすじ〉

天女を妻とした銘苺子。しかし妻は羽衣を取戻し天に上ってしまう。残された父子は母を思い寂しく暮らしている。

ある晩、酒に酔った父から逃れる為に家を出た子ども二人は、あてどなく歩くうちに森川の井にたどり着く。そこはむかし両親が出会った場所だった。水面に映った星を取ろうとしたおめけりが足を踏み外し、助けようとしたおめけりが足を踏み外し、助けようとしたおめけりも一緒に井に落ちてしまう。

仮死状態となった二人は天上で母に会う。すぐに戻れと叱る天女に、二人は、今の父の所に戻るなら死んだ方がましだと訴える。天女は逡巡するが、下界の様子をのぞき、今の銘苺子の元にやるよりは自分の側にいる方が子ども達にとって幸せではないかと考える。

しかし子ども達を引き取ろうとした天女に天人五衰が始まる。ここにはいけないと悟った子ども達は、命からがら下界へと戻る。

死にかけての子ども達の姿を目にして、自暴自棄だった銘苺子も目を覚ます。これからは心を入れかえて皆で生きていこうと、上がる虹雲に誓う。

〈人物〉

おめなり（思鶴）

おめけり（亀千代）

銘苺子

天女

農夫（初老の男・間の者）

〔第1場〕

歌「仲間節」

朝夕忘れらぬ

〔朝夕忘れられない〕

恋し面影よ

〔母様の面影〕

一時どやても

〔ほんのひと時でも〕

見ぶしやあもの

〔お会いできたら〕

おめなり、出羽。

桶を持ち、踊りながら出る。

おめなり

今出る我身や

〔今登場した私は〕

銘苺子の娘

〔銘苺子の娘です〕

森川の井に

〔この森川の井戸に〕

水汲みに来ゆる

〔水汲みに来ました〕

こまや父母の

〔ここは父母の〕

なれそめの所

〔出会った所〕

縁結で後や

〔結婚した後は〕

二人愛々と

〔二人仲良く〕

父親や畑はるの

〔父は畑の仕事に〕

物作りして居て

〔精を出し〕

母親いやい

〔母は〕

我等もり育て

〔私達を守り育てて〕

幸せな暮らし

〔楽しく暮らし〕

不足ねんやしが

〔何の心配もありませんでしたが〕

去年の若夏に

〔去年の若夏に〕

去年のうりずんに

〔去年のうりずんに〕

母や

〔母は〕

虹色の衣

〔虹色に煌めき〕

蜻蛉羽をまとい

〔蜻蛉の羽のように軽やかな衣をまとい〕

あの松の上に

〔あの松の上〕

あの雲の上に

〔あの空の上を〕

飛び立ちやい居らぬ

〔飛び立ってしまった〕

姿見んねらん

〔姿が見えなくなってしまう〕

父の言葉や

〔父が言うには〕

すだし母親や

〔産みの母は〕

世界の人ならぬ

〔この世界の人ではない〕

定めごとやりば

〔定めであるから〕

肝ぐりしやあしが  
分かつてとらせ：  
〔気の毒であるが〕  
〔分かつてほしいと〕

おめなり、しばし思い入れ。  
が、立直り、

おめなり

やがて日も暮れる  
急ぎ戻ら  
〔じきに日が暮れる〕  
〔急いで戻ろう〕

おめなり、水をくむ。  
そののち、下手側に移動。  
幕内にむかって、

おめなり

とうとう

〔もしもし〕

今ど 戻やべたん

〔今、戻りました〕

銘苺子、下手側から出る。

その袖を掴み、おめけりも一緒に出。

銘苺子は、足元がふらついている。

（酩酊している）

おめなり家に入り（下手側）、桶を置く。

銘苺子、そのまま寝転がる。

おめなり

やあ父親よ

〔お父様〕

御酒召し方の

〔少しお酒が〕

過ぎしごとあらね

〔過ぎませんか〕

銘苺子

我が酒どやゆる

〔私の酒だ〕

我が物どやゆる

〔私の物だ〕

おへな事ないさめ

〔過ぎる事があるか〕

推算な童

〔生意気な子め〕

銘苺子、にらんで手を上げる。

おめなり、おめけりを連れて、二人で

逃げるように家を出ていく。

（舞台中央へ）

銘苺子、バツが悪そうに去る。

（下手ハケ）

おめけり

やあ おめなりよ

〔姉様、〕

まかへ行きゆが。

〔どこへ行くの？〕

おめなり

行く所知らぬ

〔行く所は知らない〕

戻る所無らぬ

〔帰る所もない〕

母よ失たる

〔母をなくした〕

この二人でもの

〔私達二人は〕

宛て所なしの

〔どこにも寄る辺を〕

哀れ小舟

〔なくしてしまつて〕

二人、舞台を一周歩く。

歌「子持節」

月明りたよて

〔月明りを頼りに〕

歩む道まかへ

〔どこへ行こうか〕

空見れば母の

〔空を見れば母への〕

思いまさて

〔思い込み上げて〕

歌の間に下手に月桃の木を出す。

歩いてきた二人、木の側で立ち止まり、

おめなり

ああ、こまや

〔ああ、ここは〕

森川の井やゆる

〔森川の井戸〕

またもこまにやい

〔またここに〕

足よどで居たる

〔来てしまったのか〕

父母の二人や

〔父様と母様が〕

振合わちやる井泉かわよ

〔出会った場所〕

今日や名に立ちゆる

〔今日は名にし負う〕

七夕どやゆる

〔七夕です〕

願事や一つ

〔願い事は一つ〕

叶うどんやりば

〔もしもかなうなら〕

織姫のごとに

〔織姫のように〕

我身も母親に

〔私達も母様に〕

引き会わちたぼり

〔会わせて下さい〕

天の星よ

〔天のお星さま〕

おめなり、祈る。

おめけり、月桃の葉を取る。

おめけり

くりや

〔これは〕

かばしゃ匂高さ

〔姉様、いい香り〕

何の花どやゆが

〔何の花ですか〕

おめなり

月桃<sup>サンニ</sup>どやゆる

〔月桃だよ〕

お守りどやゆる

〔お守りだよ〕

夜道行く二人や

〔夜道を行く二人を〕

守り給り

〔お守り下さい〕

おめなり、月桃の葉をサンの形に結び、  
おめけりの懐に入れさせる。

おめなり

やあ おめけりよ

〔ああ、おめけりよ〕

水あまた湧きゆる

〔水が沢山あるよ〕

飲めよ、飲めよ

〔これを飲みなさい〕

おめなり、水を手で汲んで、おめけりに

飲ませる。

おめけり、しゃがんで水面に向かって目をこらす。

おめなり

水面照りうつち

〔水面に映る〕

星加那志光

〔微かな星の光〕

ゆらゆらと揺れて

〔ゆらゆらと揺れて〕

光るきよらさ

〔きれいだね〕

おめけり

美らさ美らさ、

〔綺麗だね〕

取りぶしややあもの

〔取りたいな〕

おめけり、つかもうとして手をのぼし、  
バランスをくずす。

そのまま上手側に倒れこみ、ハケ。

おめなり

やあ、おめけりよ！

〔弟よ！〕

（おめなりも助けようとして上手側に倒れ  
こみ、ハケ）

〔第2場〕

天女、頭に飾り花を挿し、羽衣をまとい  
上手奥から出。

歌「子守節」

定めことやれば

〔定めごとであれば〕

誰よ恨めゆが

〔誰も恨めないが〕

なし子面影の

〔気になるのは〕

つのである

〔残した子ども達〕

天女

我身や天地人あめち

〔私は天界に暮らす〕

天女どやゆる

〔天女です〕

若さてる時分

〔若き日に〕

過ちやおかし

〔過ちをおかし〕

天下りて一時おチウトウチ

〔地上にて、一時〕

頭洗ひしに

〔水浴びをしたら〕

銘苺子がことど

〔土地の者銘苺子に〕

羽衣を取やり

〔羽衣を奪われ〕

凶らずの契り

〔思いがけず結婚し〕

玉黄金二人

〔二人の子に恵まれ〕

かりそめの幸せ

〔それなりに幸せに〕

暮らちやりおれば

〔くらしていたら〕

産し子云言葉に

〔子ども達の言葉に〕

八ツ俣の倉に

〔八ツ俣の倉に〕

隠ちおる聞きやり

〔隠したと聞いた〕

羽衣を取やり

〔羽衣を取り戻して〕

天上る嬉しや

〔天に戻る嬉しさは〕

何にぎやな譬てる

〔何にたとえよう〕

（顔をうつむけ、絞り出すような声で）

肝かかて居すや

〔気がかりは〕

残ちおる童

〔幼い姉弟のこと〕

母とめておれば

〔まだ母が恋しい頃〕

天上る我身に

〔天に上る私を見て〕

ももすがりすがて

〔すがろうとして〕

やあ母親よ

〔母親よと〕

あびいゆる声か

〔呼び叫ぶ声か〕

耳に残り

〔今も耳に残る〕

天女、虚空を見上げて、

天女

今日は名に立ちゆる

〔今日は名にしおう〕

七夕どやゆる

〔七夕です〕

星に願かけて

〔星に願いかけて〕

もしか叶わりば

〔もしも叶うなら〕

玉黄金産し子

〔子ども達に〕

一目ど見ぶしや

〔一目会いたい〕

歌「さあさあ節」

忘れて忘らん

〔忘れようとして忘れられない〕

愛し面影よ

〔愛しい面影よ〕

天地振り別つ

〔天地を分かつ〕

無情の習い

〔無情の理が裂く〕

天女、歌の間に一周する。

その間、おめなりとおめけりが下手側から出てきて、上手側に倒れ込む。

天女は二人を見つける。

天女

やや

〔やや〕

いきやしたることか

〔これは何とした事〕

起きれきれ 産し子

〔起きなさい子ども達よ〕

おめなり、おめけり目を覚まして、

おめなり・おめけり

やあ母親よ

〔母様！〕

歌「東江節」（二揚調子）

あけやう母親よ

〔ああ母様〕

夢やあらね

〔夢ではないかしら〕

三人、抱き合う。

しかし天女、二人を急に離して、

天女

急ぎ立ち戻れ

〔もう行きなさい〕

愛し思産子

〔子ども達よ〕

この世界の事ど

〔この世界のことば〕

覚出しやならぬ

〔思い出してはならない〕

急ぎ人の世に

〔急いで下界に〕

戻り人の世に

〔戻りなさい〕

一期振り向かず  
〔振り向かずに〕  
一足も急ぎ  
〔行くのですよ〕

おめなりは納得していない様子で下を  
向く。

天女

こまは  
〔こまは〕

人ならぬ世界や  
〔あなた達と違う〕  
常ならぬ世界や  
〔世界です〕

あてなしどやれば  
〔幼いあなた達には〕

肝痛さあもの  
〔あまりに痛ましい〕

早や元に戻り  
〔早く元に戻って〕

早や世界に戻り  
〔早く下界に戻って〕

父の仰せごと

〔お父様のいう事を〕

胸に思染みて

〔よく聞いて〕

暮らちたぼれ

〔暮らして頂戴〕

母の分も

〔母の分も〕

おめなり

父親やしが：

〔その父様が…〕

天女、下手側に向かって目の前の雲を払

うしぐさ（下界をのぞく）。

下手側に銘苺子、酒を持ち、足をふらふ

らさせて出てくる。

酒をくらい寝転がる。

天女

！（驚く）

おめなり

（早口で）

母去りし後や

〔母様が去ってから〕

父や人変わて

〔父様は〕

昔事あらん

〔変わってしまった〕

畑よ投げうちて

〔畑にも行かず〕

朝夕酒盛やい

〔毎日酒びたり〕

ためるものはなち

〔食べ物もなくなり〕

此頃やいちも

〔この頃はいつも〕

水びけいでもの

〔お水だけ〕

急ぎ村戻て

〔戻って〕

父親と共に

〔又あの父と〕

暮らさせてや言すや

〔暮らせとというのは〕

無理やあらね

〔いやです〕

やあ、母親よ

〔母様、〕

死にやる苦さより

〔それは死ぬより〕

永らえる苦さ

〔つらいこと〕

我身の願一つ

〔願いは一つだけ〕

とてもこま居とて

〔ここで〕

おめけりに楽よ

〔おめけりを安心〕

与え欲しやあもの

〔させてあげたい〕

たんで聞き分けて

〔どうぞ〕

許ち給り

〔許して下さい〕

おめけり

我身も

〔僕も〕

母の側に

〔母様の側にいたい〕

天女

あてなしの童

〔不憫な子達〕

肝ぐりしやあしが

〔可哀想だけれど〕

この世界のを

〔この世界のを〕

かみよかみならぬ

〔食べてはいけない〕

もしか呉れやらば

〔もしあげたら〕

二度と戻ららぬ

〔二度と戻れない〕

父親の側に

〔父親の側に〕

元の世界に

〔元の世界に〕

おめなり

それど願たこと

〔それでよいのです〕

やあ母親よ

〔母様〕

おめけり

やあ母親よ

〔母様〕

歌「東江節」（本調子）

あきよ 玉黄金

〔子どもたちよ〕

抱きぶしやぬ腕かいな

〔抱きしめたい〕

願て叶えらん

〔それだけの事が〕

天の定め

〔許されないのか〕

天女

（独白）

今の銘苺子ど

〔今の銘苺子は〕

父や父あらん

〔すでに父ではない〕

産子の御為

〔この子達の為に〕

我身の側に：

〔私の側に…〕

天女

（考えを振り切るように頭を振り）

肝迷いするな

〔母を困らせないで〕

肝騒ぎするな

〔母を迷わせないで〕

あかさでの時分

〔幼いあなた達には〕

分からぬ事でもの

〔分からないかもしれないが〕

今日共に休ま

〔今日は共に寝よう〕

母の懐に

〔母と共に〕

やしが

〔でも〕

明けの鶏の

〔明けの鶏の〕

初鳴きの前に

〔第一声の前に〕

必ずと戻れ

〔必ず帰りなさい〕

急ぎ戻れ

〔急ぎ戻りなさい〕

おめなり

側に置きたぼれ

〔もう離れないで〕

やあ母親よ

〔母様〕

おめけり

やあ母親よ

〔母様〕

歌「遊び子持節」

三人は、上手側で横になる。

子ども達二人は、両側から天女の袖をし  
っかりと握りしめて眠る。

天女、二人を寝かしつけてから、自分も  
横になる。

三人は川の字になって寝る。

願たこと叶て

〔願った事が叶って〕

久方の母子

〔久しぶりの親子〕

いつもいつまでも

〔いついつまでも〕

御身が御側

〔あなたの御側に〕

下手側、農夫が出て来る。

農夫（間の者）

我やこの村の

〔私はこの村の〕

農夫ハルサーどやゆる

〔農夫です〕

聞けば銘苅子

〔聞けば銘苅子は〕

刀自小に逃げられて

〔妻に逃げられて〕

童んちゃーや

〔子ども達は〕

あさましの暮らし

〔ひどい暮らしとか〕

肝障りやごと

〔心配なことだ〕

どれ、急ぎ行かに

〔行ってみよう〕

農夫、銘苅子の家の戸を叩き中に入る。

農夫

とう 銘苅子

〔やあ、銘苅子〕

夜分に尋めいてやしが  
〔夜分に邪魔するよ〕

芋や茹でぐとう  
〔芋を茹でたから〕

平生や芽芋びけい  
〔いつも芽芋ばかり〕

かみどうやしが  
〔食べているだろう〕

童んちちゃーよ  
〔子ども達よ〕

童んちちゃーよ  
〔子ども達よ〕

農夫、眠っている銘苳子に近付き、顔を

近づけて、自分の鼻をつまむ。

## 農夫

あい、  
〔なんだい〕

酒臭さあもの  
〔酒臭いこと〕

あんね美ら刀自小  
〔綺麗な女房に〕

遁んぎとーるうむん

〔逃げられて〕

肝痛さあても

〔悲しいのは〕

仕方のない事やし

〔仕方がないが〕

あてなしの童

〔可愛い子ども達を〕

守り育て、

〔しっかり育てて、〕

（辺りを見回して、）

とう、童んちゃーや

〔チビちゃん達は〕

まーやが、

〔どこだい〕

何処にもおらんやし

〔何処にもいないね〕

## 銘苺子

（寝返りを打つ）

農夫

（銘苧子を一瞥して）

情けないらんこと

〔呆れたものだ〕

村中の噂事やゆる

〔村中噂しているよ〕

銘苧子も昔は

〔銘苧子も昔は〕

働き者やしが

〔働き者だったが〕

今ど畑も荒れ果てて

〔今は畑も荒れ放題〕

かみむんもなく

〔家には何もなくて〕

やーるーも遁んぎちやる

〔やもりも逃げた〕

とう、童んちやーよ、

〔どれ、子ども達〕

（室内をみまわして）

おらぬ…

〔いない…〕

（ふとんをそつとはぐ）

おらぬ…

〔いない〕

（あちこちを探しまわり）

おらぬ！

〔いない！〕

とう！

〔おい！〕

（銘苺子に手をやり）

童んちゃーや

〔子ども達は〕

まーやが!?

〔どこへ行った!?!〕

銘苺子、農夫の手を放す。また寝る。

農夫

！

農夫、外に出る。

農夫

銘苅子の

〔銘苅子の〕

童んちゃーやおらん

〔子ども達がいない〕

一大事どー！

〔大変だー！〕

（農夫、下手ハケ）

上手側の天女、起き上がり顔をそむけ、

天女

今見ゆるものや

〔これが〕

銘苅子の姿…

〔今の銘苅子の姿…〕

天女、立ち上がろうとするが何かに袖を  
引っ張られよろける。

見ると抑えているのは子ども達の手。二

人は眠っているが、しっかりと天女の袖をつかんで離さない。

天女

……

天女、優しく二人の手をほぐして外す。

立ち上がり、下手側を見つめる。

その視線には憐みをふくんで。

銘苺子、のっそりと起き、ふらつきながら立ち上がる。

銘苅子

我身も

働きぶしやあもの

刀自戻るならば

やしが、

戻ららぬあもの…

（酒をあおる）

〔…私だって〕

〔働きたいんだ〕

〔妻が帰ってきたら〕

〔だが〕

〔帰ってこない…〕

天女

森川の井で

振合ちやる時分

力満てる姿

今やあらぬ

〔森川の井戸で〕

〔出会った頃の〕

〔力に溢れた面影は〕

〔もうどこにもない〕

二人、唱えながら、両側から段々と舞台中央に近付いていく。

銘苺子

天上の女

〔天上の女〕

過ぎたるの女

〔私には過ぎた女〕

夢や夢の中

〔見果てぬ夢と〕

諦めどやしが

〔諦めればいいのだろう〕

天女

二人童とて

〔子ども達には〕

一人よすがやもの

〔たった一人の父〕

あてなしの童

〔幼い姉弟は貴方を〕

御身のそばに

〔頼るしかない〕

銘苺子

…おめなりの姿

〔…上の子は、〕

母に似てきちやる

〔母に似てきた〕

もしか売りならば

〔もしも売ったら〕

いかなげら

〔どうなるだろう〕

天女

……！

銘苺子

おめけりは

〔下の子は〕

糸満にやらね

〔糸満にでも売るか〕

天女

けれど、

〔…これが、〕

今の銘苺子！

〔今の銘苺子！〕

夫婦てる時分

〔夫婦だった時間は〕

夢か幻か

〔夢か幻か〕

銘苺子がことど

〔銘苺子がこうも〕

このなりになたら

〔落ちぶれようとは〕

愛し思子に

〔可愛い子ども達に〕

義理情ないらん

〔義理も情もない〕

鬼のごとめしやうる

〔鬼のようだ〕

人の心ないらん

〔人の心を失った〕

いへも思産子

〔子ども達を〕

渡すことならん

〔渡す事は出来ない〕

銘苺子

天上のほてからや

〔お前の所に行けば〕

地にや戻られぬ

〔二度とこの世に戻れない〕

我身も天上も

〔私とお前、〕

ともに地獄

〔どちらも地獄だ〕

天女

！

二人、舞台中央で対峙する。

銘苺子、天女をにらむ。

天女、一歩も引かず。

天女、羽衣をひらめかせ応戦の構え。

銘苺子、その羽衣の端をつかむ。

まるで羽衣が二人の子どもでもあるかの  
ように、銘苺子と天女は奪い合う。

音曲「笠の段」

天女、強引に羽衣を取戻し、

天女

……

銘苺子、天女を睨みつけるも、やがて膝  
をつく。うつむいて、

歌「散山節」

望み絶え果てて

〔望み絶え果てて〕

いきやす暮らされが

〔どう暮らせようか〕

生き欲しやぬ命

〔生きたい命は〕

露と果てて

〔露と消えたのに〕

銘苺子、下手側にハケ。

天女、銘苺子が去った方を見つめ、

天女

……

おめなり、目を覚ます。

おめなり

（自分の手を見て、）

母親よ！

〔母様！〕

天女、おめなりの側に行く。

おめなり、天女を見上げて、

おめなり

母親よ、

〔母様〕

天女

とうとう、

〔さあ、〕

じき朝餉の時刻

〔食事にしましょう〕

天女、上手側へ行こうとする。

おめなり

（天女の背中に）

母親よ、

〔母様〕

天上の朝餉

〔この世界の食事を〕

我身に呉れをがま

〔私達にくれるの？〕

天女

（振り向かず、そのまま立ちつくし）

……

おめなり

嬉しやあもの。

〔嬉しい〕

天女、おめなりを振り向き見つめてから、  
上手ハケ。

食事を持って、再登場する。

この時、天女は頭の花飾りを腐り花に取り換え、すこし右側に差して（出る時に客席に見えないよう）、打掛の下にもう一枚腐り花の衣装を着て（隠して）現われる。

おめなり、母の方を向いて（花はまだ見ない）、鼻を袂で抑える。

天女

？  
（首をかしげる）

おめなり

異風な臭いやしが：

〔変な臭いがするが〕

天女

さあ、かめよかめよ

〔さあ、食べなさい〕

おめなり

うう。

〔はい〕

（一口ふくむも、吐き出す）

やあ母親よ、

〔母様〕

くりどう、

〔これ〕

腐りゆる…

〔腐っている…〕

天女

ぬうことやが

〔何を言うの〕

天女、食事を取り食べる。

おめなりに食事を再度差し出す。

おめなり

……！

（あどずさる。鼻をふさぎ）

やなかじやや…

〔ひどい臭い、耐えられない…〕

おめなり、天女の頭を見て驚き、指さし、

おめなり

花よ、花よ、

〔花が、花が、〕

やあ母親よ

〔母様〕

いかがかしやびたん。

〔どうしたのですか〕

天女、おめなりから顔をそむける。

その拍子に、頭の腐り花が客席に見える。

着ていた打掛を脱ぎ、下の腐り花の衣装

が露わになる。

歌「ノンフリ節」

天人の五衰

〔天人五衰の〕

しるし現はれて

〔印が現われて〕

誰も逃れらん

〔誰も逃れられない〕

定めさらめ

〔定めなのだ〕

おめなり

（後ずさり）

やあ母親よ、

〔母様〕

こまは

〔ここは〕

我身の世界あらぬ

〔私達の世界ではないのですね〕

今ど

〔今こそ〕

今ど思み知ゆる

〔今こそ知りました〕

起きれおめけりよ

〔さあ起きて弟よ〕

急ぎ行かに

〔急いで行こう〕

おめなり、おめけりを起こす。おめけり、まだ寝ぼけ眼で目をこすっている。

おめなり、おめけりの手をとって、舞  
台上を逃げる。

天女が追いかける。

## 天女

玉黄金産子、

〔子ども達よ〕

待ちよれ待ちよれ

〔待ちなさい〕

天人五衰の始まった天女は、身体が一気に衰え、思うように動けない。足をひきずりながら、必死に追いかける。

何度かのやりとりのあと、天女、ついに二人を下手側に追い詰める。

音楽（川が流れる音）

おめなり、後ろを振り向き、

おめなり

こまは…

〔ここは…？〕

天女

天の川岸边

〔天の川の岸边〕

我が世界の果てよ

〔天上の世界の果て〕

五色きらきらと

〔五色の星々が〕

星々の流る

〔滔々と流れる〕

戻りみしより

〔戻りなさい〕

我した玉黄金

〔可愛い我が子〕

おめなり

……

おめなり、その場から動けない。

天女、力を振りしぼり子ども達に近付き、  
ついに捕える。

おめなり

（恐怖に）

母親よ…!?

〔母様……!?!〕

その時、衝撃！

天女、はじかれ、倒れる。

おめなり、おめけり、驚く。

おめけり

…？ …あ!?

〔…？ あ!？〕

おめけり、懐からサンを取り出す。おめ  
なり、手を差し伸べ、おめけりと共にサ  
ンを持ち、天女に向ける。天女、それ以  
上二人に近づく事が出来ず。

天女

………！

おめなり、サンを足元に置き、足を載せ、

おめなり

月桃サンミンの小舟

〔月桃の小舟よ〕

天の川渡れ

〔天の川を渡れ〕

天と地をつなぎ

〔天と地をつないで〕

戻ちたぼり

〔私達を戻して！〕

おめなりとおめけり、そのまま地上へと

戻る。（下手ハケ）

天女、追いかけてようとして川に入るも、

それ以上進むことができず、がつくりと

膝をつき倒れ込む。

歌「述懐節」（二揚調下出し）

いきやしたる事が

〔何という事をしてしまったのか〕

母なゆる我身や

〔母である私は〕

童為事ど

〔何より子の幸せを〕

思てあだが

〔願っていたのに〕

激しい悔恨。

天女、狂おしく羽衣を振りながら、上手側へ。下手側へ視線を送り、大きく羽衣を振って（二人の道中を見守るように）、上手ハケ。

〔第3場〕

歌「七尺節」

ままならぬならば

〔望み通り生きられぬなら〕

一期振り捨てて

〔この命を振り捨て〕

まこと夢の中

〔醒めない夢の中に〕

いるが心気

〔いる方が幸せだ〕

銘苺子、下手から出。

ゆつくりと、足元をふらつかせながら

（酩酊している）やって来て、舞台を一

周する。

歌の間、下手（幕内）から農夫の声。

農夫

見つけたる、

〔見つけた〕

銘苺子の童！

〔子ども達！〕

下手側に子ども達が出て倒れる。

銘苺子、近付いて子ども達の顔を覗き込

む。それはおめなり、おめけり。

銘苺子、驚いて子ども達を抱き起こす。

銘苺子

やあ童達、

〔子ども達よ〕

やあ童達！

〔子ども達よ！〕

子ども達、目をゆっくりと覚まし、

おめなり

…父親よ？

〔父様？〕

銘苺子

玉黄金産し子、

〔子ども達よ〕

許ちたぼり！

〔許しておくれ〕

銘苺子、二人の子どもに深々と礼。

歌「東江節」（二揚調子）

あけよ 産子

〔子ども達よ〕

許ちたぼり

〔許しておくれ〕

おめなり、銘苺子の肩にそつと手をおく。

銘苺子、ゆつくりと顔をあげて3人見つめ合う。3人、互いに手を取り、下手側にハケ。

〔第4場〕

音曲「遊び子持節」（笛）

銘苺子、おめなり、おめけりの手を引いて、下手側から登場。

銘苺子

くりや銘苺子

〔これは銘苺子〕

天降りしやる女

〔伝説の天女を〕

縁づきたる男

〔妻にした男〕

肝ふれて居たら

〔狂っていたのか〕

肝迷て居たら

〔迷っていたのか〕

刀自去りし後や

〔妻が天上の世界に帰ってから〕

全てうち捨てて

〔全てを捨てて〕

浅ましのくらし

〔つまらない生活を〕

送りたしやしが

〔送っていたが〕

童失なやい

〔子を失いかけ〕

目よさましちやる

〔目を覚ました〕

刀自母の去るは

〔妻を母を失うのは〕

耐え難しやしが

〔耐え難いが〕

二人童命よ

〔子ども達の命は〕

何に替えららん

〔何に替えられよう〕

今日からや心

〔今日からは心を〕

引きよ改めて

〔入れ替えて〕

畑仕事励ま

〔仕事に励みます〕

産子御為

〔子ども達の為に〕

（両側の子を見やり）

産子ど宝

〔子どもは宝〕

産子ど黄金

〔子どもは黄金〕

童失うは

〔お前達を失っては〕

耐え難しやあもの：

〔生きてはいけぬ：〕

子ども達、うなずく。

三人、見上げて。

銘苺子

綾雲よ連れて

〔雲を照らして〕

上る太陽加那志

〔朝日が昇る〕

天地あめつちよ照らち

〔天地を照らして〕

我肝解わがかんでら

〔心も生まれ変わる〕

ああ尊と

〔なんと尊いことだ〕

三人、拝む。

おめなり、一步出て、

おめなり

上がる虹雲のじぐもよ

〔朝日受けた虹雲は〕

羽衣はつえの如く：

〔母の羽衣のよう〕

歌「立雲節」

上がる虹雲や

〔きらめく虹雲が〕

天にもどろきやい

〔空にたなびき〕

我胴よ包みゆる

〔私達を包む〕

母の御衣<sup>みす</sup>よ

〔母の羽衣のように〕

三人、手を繋ぎ下手側へと歩き、退場。

（終）